
魔女クレナイの企み

おやつ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔女クレナイの企み

【Nコード】

N7397N

【作者名】

おやつ

【あらすじ】

外見年齢15歳の魔女クレナイは100歳の誕生日にある手紙を受け取った。それは光子降臨の知らせ。自らの野望を実現する為、異世界から来た普通の少女を光教団のトップに据えようと奮闘するクレナイの話。

ある母娘の会話

「母さん母さん、何かお話して」

「仕方のない子だね。じゃあ光教団の話をしてあげよう。そしたら寝るんだよ」

「はい、母さん」

「むかしむかし、神様が人間を御造りになった時の話さ。人間は神様と違ってとても脆かったんだ」

「もろい？」

「弱いつて事だよ。ほら、お前だって転んだら怪我をするし、村長の所の坊ちゃんも病気がちで外にも出られないだろう？そうやってすぐ怪我をしたり病気になる人間を哀れんで神様は泉を作ったんだ」

「それ知ってる！ボルアの泉だ！」

「そう。ボルアと他に四つ。神様は全部で五つ泉を作った。その泉の水を人間が飲んでみると、不思議や不思議。怪我也病気もたちまち治っちまったんだよ」

「へえ。じゃあ村長の所のセルゲイもボルアの泉の水飲んだら治るの？」

「話はまだ終わってないよ。そうやって神様が折角泉を作ってくれたのに、愚かな人間は競って泉を奪い合い争いを起こしたんだ。いっしょか泉はそうして流れた血で真っ赤に染まってしまった」

「怖いよ母さん。それじゃあ神様怒っちゃうんじゃない？」

「ああ。怒った神様は人間に罰を与えたんだ。愚かな人間は全身を真っ黒な光に包まれてしまった。それでも神様は慈悲を与えて下さったんだね。心優しい人間は白い光に包まれた。そして最も心の綺麗な人間は金色の光を纏った。その金の光に包まれたお方が泉に触れると、たちまち赤に染まった泉が元通りになっただよ」

「うわあすごい！」

「金色の光に包まれたお方、光子様は泉の水を飲んで治癒の力を手に入れた。かの方が手を触れるだけでどんな怪我もどんな病気もみるみる間に治っていったんだそうだ。白い光に包まれた人達も泉の水を飲むと治癒の力を手に入れる事ができて、光子様には及ばないがその治癒の力で世の人々を治していった。それが光教団の始まりだ」

「それって白徒の事？」

「白徒様とお呼びなさい。彼らがいらっしゃるお陰で私達は生活できているんだから」

「でもじゃあ何でセルゲイはまだ病気が治らないの？」

「白徒様は遠いところにいらっしゃるからだよ」

「じゃあやつぱりボルアの泉に行かなきゃ」

「駄目だよ。神様の怒りに触れた人間が泉の水を飲むと、たちまち全身が真っ赤な光に包まれて死んでしまうんだそうだ」

「ええ。やつぱり泉なんか行かない！」

「ほら、もうお話は終わりだそろそろ寝なさい」

「怖くて眠れなくなっちゃったよ。一緒に寝てよ母さん」

「本当に仕方のない子だね。一緒にいてあげるから、さあお眠り」

「やったあ！お休みなさい、母さん」

「ああお休み、サーシャ」

序章 1 手紙

「百歳のお誕生日おめでとございます！お師匠様！」

上から降ってきた馬鹿みたいに大きな声に、快適な眠りを妨げられてしまった。

うつすら瞼を開けると馬乗りになって満面の笑みを浮かべる馬鹿弟子が視界に入る。最悪な目覚めだ。

「煩い馬鹿。どきなさい。さもなくば蹴り倒す」

言いながら膝蹴りを食らわす。ちょうど良い具合に急所に入ったようで床に転がりながら大きな体躯を捻って悶絶する馬鹿弟子に、何故こんなのが一番弟子なのだろうかと半ば本気で考えてしまった。顔はまあまあ整っているのに、言動が全てを台無しにする典型的な馬鹿。

「ひっ酷いっお師匠様！せめて忠告して一秒待ってから行動に移して！」

「ああ一秒待った」

「待ってなかった！むしろ言うより早く蹴った！」

「ああ悪かった悪かった。何せ年を取ると物覚えが悪くなってるな」

弟子が吠えてくるのを軽く受け流しつつベッドから起き上がる。

ついでに床に転がってる馬鹿を蹴り転がして扉の外まで追い出した。

「酷いっ。中に入れてくださいよお師匠様」

「貴様乙女の着替えを覗く気か？」

「乙女っていう年じゃないから大丈夫です」

扉の向こうから聞こえてきたのは紛う事なき暴言。ダンツと音をさせながら扉を蹴るとやつと静かになった。

やれやれ、と溜め息を吐きつつ黒のワンピースに着替える。腰まで伸びた髪を頂の辺りで軽く結べば用意は完成だ。さあ顔でも洗うに行くか、と扉を開ければ。

耳を垂れ下げてうなだれる犬がいた。

蹲る様にして座り込み、額を床に擦りつけている弟子は、正に犬だ。はて、お仕置きされるのを待っているのだろうか。とりあえず軽く足で小突いてみる。

「退け。邪魔だ」

と、勢い良く上体を持ち上げた犬はキャンキャン吠えてきた。

「酷いですっ！俺はこうして反省の意を示してるのにこの仕打ち！そもそも俺はお師匠様の誕生日を祝って差し上げようって」

「頼んでない」

「祝わせて下さい！お願いします！」

凄い勢いで逆に頼まれてしまった。しかし答えは決まっている。

「断る」

「そんなあつ」

「百年の時を過ごしたのが何の祝いになるといつのだ」

未だ床に座ったままの弟子を、腕を組んで見下ろす。こうなった

ら徹底的に言い負かしてやろうという気になってしまった。

「そも誕生日という概念が気に入らん。私の生まれた村ではそんなものを祝う風習は無かったからな。新年の祭りに皆等しく年を取った。それとて新しく新年を迎えられた、という意味合いの祝いだ。しかしどうだ？今の生活を見る。食う物にも困らんし奇襲を仕掛けてくる敵もおらん。こんな安穩な日々を過ごして何が祝いだ。下らぬ風習よ」

そもそも別に百年前の今日この日に生まれた訳ではない。唯人生の半分を過ごした地でこれまた共に過ごした時間が長かった友が勝手に人の誕生日を決めたのだ。毎年盛大に祝われたのは嫌ではなかったが、その友亡き今、祝い事に付き合う理由もない。しかし馬鹿弟子は尚も食い付いてくる。

「その安穩な日々に感謝の気持ちを！というか俺が唯お師匠様の為に祝いたいだけです！どうかご慈悲を」

平伏するかの如く再び額を床に擦りつけ始めた弟子を半目で睨みつけた時だった。

「魔女殿。取り込み中でしたか？」

新たな声が割って入り、そちらを見やるといつも手紙を届けて来る若者が苦笑していた。

「いや、見苦しい所を見せて悪かったな」

「いえいえ。一応玄関で声をお掛けしたのですが、此方で話し声がしたので勝手に入ってしまった。シロウ殿もお変わりないようで何よりです」

「もつと成長してくれば尚良いのだがな」

特に馬鹿な所と人の話を聞かない所を是非とも直して欲しい。

「あはは。魔女殿も相変わらず厳しくていらっしゃる。それではこれが今日の分です」

「うむ。ご苦労」

手紙の束を受け取り若者を帰らせた。

ぱたぱたという足音が段々小さくなり、やっと静かになった空間で束をぱらぱらと見やると、興味深い送り主からの手紙があった。急ぎ自室に戻り、封を切る。

「あのお、お師匠様？誕生日の件は？」

「煩い」

恐る恐るといった風に聞いて来る馬鹿弟子は未だ床に這いづくばったままだ。普段ならみつともない所を他人に見せるなど一言注意するのだが、今は馬鹿に構っている余裕はない。

近況が書かれた極普通の文章に秘された単語を抜き出し、暗号を読み解いていく。十分程かかっただろうか。やっと明らかになった文面を何度も読み直し、思わず感嘆の溜め息をもらしてしまふ。

「お師匠様？」

作業の終了を察した弟子の呼びかけに、機嫌良く返してやった。

「どうやら最高の誕生日になりそうだぞ」

同時に解き明かされた文面を紙面に書き移して弟子に放り投げる。

「『四年後陽が昇る』？」

うーんと悩み始めた弟子の隣で、私もまた悩んでいた。

この情報をどう生かすか。最終的な目標は既に決めてある。そこに至る道筋を用意しなければならない。何処に揺さぶりをかけるか。誰に働きかけるか。不測の事態が起こっても揺るがない道筋を作る。為に何が必要か。

「ええっ！」

やっと真実に到達したらしい弟子の悲鳴に一旦考え事を止める。

「遅い」

「いやでもお師匠様っ。そんな。こんな事ってあるんですか？あれっでもう七百年も現れていない伝説の存在でしょう？」

混乱の境地にいるらしい弟子に笑いかけ。

「世の中に有り得ない事など有り得ない、と私の存在こそが証明しているではないか。咎人でありながら生きている人間がいるならば、今この時光子が現れてもおかしくはあるまい」

その単語を口に出せば、弟子はごくんと音を立てて唾を飲みこんだ。

「本当に、光子が？」

頷き、宣言する。

「私は動くぞ、シロウ。お前はどつする？」

しかと視線を合わせて問いを発する。すると紺の瞳をパチクリと瞬かせ。弟子は満面の笑みを浮かべてみせた。

「俺はお師匠様の一番弟子ですから。好きに使って下さい」

「二言は無いぞ」

「はい！」

わしゃわしゃと黒い癖っ毛を撫でてやると嬉しそうに目を細める弟子。本当に馬鹿な奴だ。私なぞに尻尾を振って。だが、その馬鹿な所が愛らしい。この馬鹿弟子の笑みが曇らない事を祈りつつ。だが決めてしまった。

魔女クレナイ。この命尽きようと、絶対に野望を実現してみせる。

2 始動

「では私は行く」

知らせの来た次の日。簡単な旅支度を整え、弟子にも荷物を押し付けた。

「行動早いですね、流石お師匠様。この家はもう引き払うんですか？」

押し付けられた荷物を肩に背負いながら苦笑を見せる弟子はやはり馬鹿だ。仕方ないか。この馬鹿はきつと死んでも治るまい。

「引き払う訳がなからう。ほんの偵察だ。すぐ帰って来る。なに、十日もかからん。それまでにお前も出立しておくように」

一応国賓として迎えられている以上昨日の今日で国を出るとは言えない。まずは様子見。その後必要とあれば此处は引き払えば良い。自分の考えに納得していたら、ゴトツと何かが床に落ちる音がした。見やれば弟子が青白い顔で荷物を落としている。

「えっ。俺もお師匠様と一緒に行くんじゃない」

「馬鹿者。今回は隠密に事を運ぶ必要がある。貴様と共に居たら目立って仕方なからう」

「お師匠様単体で充分目立ってます！」

フウとこれみよがしに溜め息を吐いてみせると、やっと静かになる。激昂しやすいのはこれの悪い癖だ。

「魔女クレナイの特徴は？」

淡々と問えば、気落ちした様子の声で、しかし流れるような言葉が返って来た。

「北方出身を示す銀の髪に灰の瞳。年の頃は若く、その姿はまるで綻ぶ前の蕾のよう。そして、血濡れが如き真紅のローブ」

「赤を身につけず、髪でも染めれば誰も魔女とは気付くまい。ナザンザにはもう十年も足を踏み入れていないのだしな」

よく知る者は殆どが古い、死んでいった者も少なくない。もう二度と行くまいと思っていたかの国と、しかし縁は切れてくれないようだ。

目指すはナザンザ国内光市ジューン。ジューンの泉を戴く、南方光教団内でも屈指の権力を誇る地区だ。そこに此度光子が現れた。本当に、運命とは分らない。

「うう。分かりましたよ。じゃあお師匠様が今回一人でジューンに行くのは良いですけど、帰って来るまでに立ってどういう意味ですか？」

まあ弟子が納得しようがしまいが私は一人で行動する気だった。それを口にはせず、代わりに命令を。

「お前はボルアへ行け」

「へ？」

行儀悪く口をぽかんと開けているアホ面を睨みつけ、もう一度言っ

「ボルアだボルア。知らぬとは言わせないぞ」

「ボルアって光市のボルアですか？あれ、俺の記憶違いでなきゃボルアって北方光教団の本部だったような」

「ああ。残念ながらお前の記憶は正常だ」

「此処って南方ですよ？行って帰って来るだけで三月はかかりますよ？」

「そうだな。一応一年は見ておけ。何、光子のお披露目まで四年の猶予はある。いつ動くかは此方からまた指示するが、とりあえず北方光教団の上層部には食い込んでおくように」

呆氣に取られた様に此方を見つめている紺色の眼を眺めながらにつこり笑ってやった。

「お前何の為に白徒になった？」

すると間髪入れず的を外した答えが返ってくる。

「お師匠様と同じ時を過ごす為であって、光教団内に潜入する為じやありません！というか俺既に南方光教団裏切ってるから向こうにバレてたら不味いんじゃない」

確かに弟子は南方光教団には警戒されているだろう。だからそっちの本部に潜入しろとは流石に言わない。だが。

「問題ない。南方と北方光教団はここ三百年は交流を持っていないからな。それにお前が裏切り者だと知れても好都合ではないか。北方光教団のことだ。南方の弱みをちらと見せれば快く受け入れてくれるだろう」

心底下らない話だが、三百年前に分裂してから南方と北方光教団は事あるごとに小競り合いを起こし、どちらが正統かで争っている仲だ。

だから弟子の素性は問題にはならないと断言してみせたのだが。弟子はまだ不満気な表情を隠さない。半目で此方を睨みながら膨れっ面を作り、やっと口を開いたと思ったたらこんな事を言ってきた。

「お師匠様は俺と離れ離れになっても寂しくないんですか？」

ああ。本当に。こいつはそんな事にこだわっていたのか。馬鹿だ馬鹿だと思っていたが、やっぱり何処までも馬鹿だ。

「全く寂しくない」

「嘘でも寂しいって言って下さいよ！」

「嘘を吐くのは苦手だが仕方ない。シロウと離れるのはとても寂しい」

「そんな棒読み嫌だ！」

「注文の多い弟子だな」

大体寂しがる訳がないだろう。もう五十年も共にいるのだからいい加減分かってても良いと思うのだが。

「お前が光教団に取られた時は十年離れ離れだった。あの時と比べたら大した時間でもあるまい」

それに、と心の中で続ける。あの時は一生の別れだと思っていた。でも今回は違う。再会を約束された別離に感傷的になる程若くはない。

「忘れずに呼び戻すから。そしたらすぐに帰って来い」

腕を伸ばすと意図を察したらしい。大きな図体を折り畳んで頭を下げてくる。そうしてやっと届く距離になった頭をくしゃくしゃ撫でてやった。

出会った頃は私の胸くらいの背丈だったのが、今では逆に私が弟子の胸くらい。その成長を憎たらしく思いやや乱暴に掻き交ぜると、やっと弟子の表情が和らいだ。

「やっぱりお師匠様には敵わないや。絶対俺の事忘れないで下さいね。それで危ない事はしないように。お師匠様はすぐ厄介事に首を突っ込むから俺は心配で夜も眠れません」

えへへ、と幼子の様な笑みを見せながらそんな事を言ってくる弟子は、やっぱり馬鹿だ。

「何を今更。厄介事を起こそうと企んでいる張本人に言う言葉ではないな」

「そうでした。じゃあボルアで足場固めたら連絡します。お師匠様は暫く此処に留まるんですね？連絡先は此処で良いんですか？」

やっとまともに話をする気になったらしい弟子に頷く。

「ああ。私の合図があるまでくれぐれも光子の事は洩らさぬように」

北方光教団の連中にも巻き込まれてもらわねばならないが、時期が大事だ。そのくらいは分かるのだろう。物分かり良く弟子も返事をする。

「分かりました！ついでに奴らの弱味握れるよう頑張ります！」

これには苦笑するしかない。弟子にそこまで出来るのか。まあ本心から期待はしまいが、その心意気を挫くような事を言うべきではないし。

「期待してるぞ、シロウ」

「はい！」

眩し過ぎる程真っ直ぐな眼差しを送る弟子。その裏にある好意の正体に気付いているからこそ、時々胸が痛む。

3 光子

弟子を丸め込んでから三日後。私は光市ジューンの郊外にいた。因みに密入国の身であるので髪は緑に染め、濃紺のローブに身を包んでいる。ここナザンザ国に魔女がいると分かれば私の行動が光教団の連中に知れてしまうが、今はその時期ではないのだ。

光市ジューンへは一本道で、少しでも道を外れれば険しい森の中。故意に放たれた人食い獣に食われてしまうだろう。しかし、敢えてそこに足を踏み入れる。

予想はしていたし剣も携えてきたが、やはり目的地に至るまで三度獣に襲われた。華麗な動きとは言えないが一応身体が反応し、運よくかすり傷で倒せた獣の血を懷紙で拭う。未だ腕が鈍っていない事に安心しつつ、久々に味わう命の危険と隣合わせの緊張感を味わって身体が歓喜に震えた。

やはり、私に平穩は似合わない。こんな事を弟子に言えばきつと怒られてしまうのだろう。今は亡き友は同意してくれそうだが。

そう、ナザンザに足を踏み入れてから亡き友の事を思い出す頻度が増えてしまった。ナザンザから逃げるように出て行っただけは数える程度にしか思い出さなかったのに。

やはり、あちこちに彼の名残があるからか。

街に立ち寄った際に活気溢れる様を見て。子供が路上で遊ぶ様を見て。酒場で男達が馬鹿騒ぎしている様を見て。

彼らの平穩を作り出したのは我が友なのだ、と誇らしく思ってしまった。

そんならしくない感傷に浸っている間に目的地に辿り着いた。

使われずに放置された古井戸。近くに人里もないのに奇妙な場所に設置されたそれを、怪しむ人もまたいない。随分長い事使われていなかった為かロープも今にも切れそうだ。

荷物から新品のロープを取り出し、近くの木に縛る。それを井戸に垂らし、慎重に井戸の中を下ると、あった。よく目を凝らさないと気付かないだろう、側面にほんの小さな突起。

そこに手をかけるて右に捻ると音を立てながら人一人がやっと通れる程の小さな穴が現れる。自分が小柄な事に感謝しながら身をその中に押し込んだ。

どのくらい経っただろうか。這いつくばる様にして穴の中を進んだ。記憶した地図に従い右に曲がり左に曲がり。

目指すは光教団ジューン地区本部最上階にある貴賓室。光子がいるならそこだと当たりをつけていた。

手探りで曲がり角を過ぎたらやっと通気口に出る事ができた。そこから更に進み、ある浴室に辿り着く。胸の鼓動が高鳴り緊張感が増していくのが、自分でも分かる。音を立てないようそつと格子を外し、浴室に足をつけた。

この先に、光子がいる。

とその前に。浴室の鏡に映った自分を眺めて思わず溜め息を吐いてしまった。

長らく使っていない道だったから、髪には蜘蛛の巣がつき、顔は真っ黒だ。音を立てぬよう細心の注意を払いながら水を出し、汚れを拭う。光子に会うのに身なりが汚ければ不審人物になってしまう。それだけは避けなければ。折角外見は美少女なのだから、光子が男であれば色仕掛けも出来るし、という下心も無かったとはいえない。まあ詰まる所、つい身なりに気を取られて警戒を怠ってしまったのだ。敵陣の中にも関わらず。

「誰？」

浴室の扉の向こうから掛けられた声に思わず肩が震えた。失態だ。いやしかし、と考え直す。声は若い女のものだった。それも震えていた。不審者を警戒してかと思うも、次にしゃくり上げるような音が聞こえ、間違いを確信する。

この子、泣いている。

「私はクレナイ。貴方は？」

努めて優しい声を出す。と、扉の向こうから不安気な声が届いた。

「私はマヒロ。ねえ。貴方も変な事言うの？」

おやおや。この子が光子だとしたら、光教団の連中は懷柔に失敗しているらしい。姿が見えない事を良い事に、にやりと悪い笑みを浮かべてしまう。

「変な事って？」

「コウシサマだとかもう帰れないとか」

当たり。やっぱりこの子が光子だった。しかも光教団が拉致してきたらしい。まあ本当に光子だったら犯罪を犯しても連れて来たいと思うのも分かる。

が、此処は敢えて罪は光教団に全て被せよう。私は良い所を全部持っていけばよい。

「光子様なんて私には関係ないわ。ねえ、マヒロ。貴方は帰りたいの？詳しく教えてくれない？もしかしたら助けになれるかもしれない」

いわ」

猫撫で声で言うと、沈黙が返って来た。既にしゃくりあげる音は聞こえない。泣き止んだか。

「貴方、何者？」

次いで警戒を露に問われ、笑いたくなる。どうやら頭が悪い訳ではないようだ。

「何者だと思う？」

「それは分からないけど。上手い話には裏があるって決まってるし。悪いけど貴方の事信用出来ない。怪し過ぎ」

まあ妥当な意見だ。私だっていきなり変な所から現れた人に助けてあげるなんて言われたら逆に警戒する。しかし、此处は上手く言い含めるべきであろう。

「信用する必要は無いわ。ねえ、扉を開けても良いかしら？もし私を怪しい人だと思ったら貴方は大声を上げれば良い。きつとすぐに人が来て、私を捕えてくれる」

あくまで下手に出て提案した。この場で貴方の方が優位にあるのだと匂わせて。優位にある人間は慢心しやすい。

案の定少しの沈黙の後ゆっくり扉が開かれた。

扉の奥から現れたのは予想通り歳若い少女であった。12、3に見えるが、四年後に成人の儀を行うという事は16になっているのだろう。女性らしい丸みを帯びた身体の線で納得できる。

そして驚くべきは髪と瞳の色。漆黒の長い髪に吸いこまれるよう

な黒い瞳。光子でありながら俗人の象徴である黒を身に纏う少女に、知らず笑みがもれる。と、少女は瞬時に顔を赤らめた。

「えーっとクレナイさん？」

先程までの警戒心が一気に霧散し、別の緊張を孕んだ少女に、今度は意図して微笑みかけた。自分の美貌が女性にも通用する事は既に知っている。

「クレナイで構わないわ。貴方の事はマヒロと呼んでも？」

「うん！うわあ、本当に美少女！ねえこの髪地毛だよね？触っても良い？」

先程まで蜘蛛の巣まみれだった髪を触らせるのは流石に不味いと思い、距離を詰めてきたマヒロから若干身を引く。

「またの機会にね。それで、マヒロは大声を開けて人を呼ぶ？」

答えを確信しながら問うと、そんな下心に気付いていないのか。あっけらかんとした口調でマヒロは予想通り否定した。

「ううん。怪しいのは無茶苦茶怪しいんだけど、これだけ美少女じやなあ。なんか勿体無いっていうか。貴方人に見つかったちゃ不味いの？」

「ええ。だから私と会った事は内緒にしておいて欲しいの」

「じゃあ助けてくれるっていうのは？」

慎重に問いを重ねるマヒロは、可愛らしい。勿論まだまだ青いという意味で、だけど。

「助けてあげられるかもしれないし、あげられないかもしれない。ねえ、マヒロ。私貴方とまたお話したいわ。今日は帰らなくてはいけないけれど、また会ってくれる？」

明言はせず、本題をはぐらかす。答えを与えなかった事で、次への期待が生まれるはずだ。

「もう行っちゃうの？」

ほら、寂し気な声を出しちゃって。最初の警戒は何処に行ってしまったのやら。でも元々今日は様子見。これで充分だ。

「また来るわ。可愛いマヒロ。覚えておいてね、私はクレナイ。貴方の味方よ」

少々芝居がかった台詞になったが、構わず手を振りマヒロを浴室から追い出す。通気口から出入りする姿を見られたら少女の幻想も崩れてしまうだろうという心遣いだ。そうして一回目の様子見は成功に終わった。

4 真実

あれから一年。一月に一度の頻度でマヒロの元に通うようになり、彼女とは大分打ち解けてきた。その中で分かった事は二つ。

一つはマヒロがほぼ軟禁状態にある事。光子として成人の儀を行うまで、連中は徹底的にマヒロを隠すつもりらしい。

そしてもう一つは情報制限。マヒロは自分が今何処の国にいるのかも分かっていない。というより、一般常識からして危ういのはどいう事なのか。

だから、マヒロは飢えている。人に。そして情報に。連中は一体何を考えているのだか。マヒロをお飾りの光子にしたいという意図は丸分かりだが、マヒロは黙って利用されるを良しとする程お人好しではないのに。

「ねえ、クレナイって頭良いよね」

ある日、出会い頭でいきなりそのような事を言われた。しかも、マヒロの表情は酷く固い。緊張しているようだ。

最近マヒロが私の来訪を知ると自主的に人払いをしてくれるので、語り合うのは専らマヒロの寝室、ベッドの上だ。勿論抜け道を使った後浴室を使わせてもらっているので私も遠慮なくベッドに寝転がれる。

だからその日も座り心地の良いベッドに行儀悪く背を投げ、横に座ったままのマヒロの背に垂れ下がっている黒髪をピンと引っ張った。

「もう。意地悪止めてよクレナイ」

怒りながら振り返ったマヒロの瞳を見つめながら優しく微笑む。

「何が知りたいの？」

きつと何かがあつた。それで彼女は焦れている。初めて会つた時の様に涙を溢すかと思われた瞳は、予想と違い焼き切れそうな情熱を宿して此方を真つ直ぐと見据えた。

「日本っていう国知ってる？」

そこが彼女の故郷か。帰りたいのか、マヒロ。よく一年我慢した。心の中で労わりながら私も上体を起こし、マヒロと視線を合わせる。

「私は聞いた事がないわ。北方や南方ではなさそうね。自治区？」

このか弱き娘に与えられるだけの情報を与えてやろう。対価は信頼だ。それを得られれば充分。そんな真摯な気持ちで向き合ったのだが。

マヒロは深い溜め息を吐き出し、顔を手で覆った。

「アメリカは？ヨーロッパは？アジアは？」

くぐもった声で吐き出される言葉は、全て聞き覚えのないもの。

「ごめんなさい、知らないわ」

「嘘だつて言つてよ。皆して私を騙してるんでしょ？」

言いながら、きつとマヒロは答えを分かっている。今まで私に聞いて来なかったのは、希望を持っていたからだろう。私ならマヒロの望む言葉をくれるだろう、という儚い希望を。
だが、知らないものは知らない。

「それがマヒロの故郷？」

尋ねると、首を大きく縦に振る。泣いているのだろうか心配しつつ、言葉を続けた。

「私が行った事のない土地なのかもしれないわ。知り合いに詳しい人がいるから聞いてみるわね」

故郷に帰す気は無いが、詳しい場所が知れば縁になるものが見つかるとは思えない。同郷の者がいれば心の慰めにもなろうと問いかけるが、マヒロは全く別の話をしだした。

「ハクトって知ってる？」

「ええ」

少々面食らった。あまりにも今更な質問だったから。何せ今いる場所は白徒達の土地だ。恐らく私以外でマヒロが会った事のある人は全て白徒であろう。

「この前初めてハクトの力を知ったの」
「知らなかったのか？」

それにも驚いた。まさかこの世に白徒を知らない者がいるとは。いや、違う。白徒がいない土地があるのか。

沸き上がる興奮を隠し切れず声を荒げてしまふ。

「その二ホンとやらには白徒はいないのか！？では病氣や怪我をしたら皆どうする？薬師がいるのか？」

「クレナイ？」

勢いに押されたのか手を後ろに付き仰け反る様な態勢で、呆氣に取られた表情を見せるマヒロを目にしてやっと我に返った。こぼんと咳払いして話を戻す。

「少し取り戻してしまつてようだ。すまない。今はマヒロの話だ」

「ううん。クレナイってなんか古臭い話し方なんだね。それが素？」

しかも見破られてしまつた。こうなつては仕方がないと観念する。

「ああ。これが素だ。マヒロはどちらがお好みだ？」

「今の方がクレナイっぽい。でも、前の女の子っぽいのもお姫様みたいで好きだな。たまには前みたいに喋つてよ」

姫様という単語につい笑みがもれてしまふ。まるで縁が無い存在だ。

「承知した。それで、白徒がどうかしたか？」

「そうなのよ。それよ。何なのあいつら。あれじゃ丸つきり超能力じゃない。フィクションの世界にしか存在しないわよ」

やはり、マヒロの故郷には白徒はいなかったようだ。それなら驚くのも無理はない。

「私も初めて目にした時は驚いた。手をかざすだけで病人の身体が

白い光で包まれ、一人では手すら動かせなかった奴が自力で起き出して。美しい光景だった」

そしてはつきり認識した。奴らと私は違うのだと。

「流石は神に選ばれた者達の成す業だ」

私は神に選ばれなかった。ただそれだけなのだと、己の身を哀れんだあの瞬間を決して忘れる事はあるまい。

あの時の衝撃。悔しさと哀しさと妬ましさをない混ぜにした感情を、薄らぎながら、しかし確かに現在も持ち合わせている事に、ほんの少しの疲れを感じながら瞳を閉じていたら、マヒ口の震えるような声が耳に届いた。

「確かに綺麗だったわよ。でもねえ、私は神に選ばれた者なんて知らないの。神って誰？イエスキリスト？ゼウス？」

またもや驚いた。マヒ口の故郷では敬う神まで違うのか。どれだけ遠き地から訪れたのだと訝かしみながらも、口を開く。

「神は神だ。この世界を創りたもうた創物主。しいていえば、神が名か」

「だからそんな奴知らないわよ！神なんて信じてる奴らが勝手に作り出したものでしょ！？ビッグバンで宇宙が生まれて地球上に生き物が生まれたのは条件が偶然良い具合だったからで微生物からこつこつ進化してやっと人間が生まれたってだけじゃない！人間の祖先は猿なのよ！」

激昂しながら叫んだマヒ口の言葉は、一から十まで意味が分からない。そして思った事をそのまま口に出してしまった。

「マヒロ。そなた、頭がおかしいのでは？」

私でさえ神を恨む事はあっても、その存在を否定した事は無かった。

何せ神は確かにいるのだ。白徒が持つ力、そして自身が受けた咎がそれを証明している。

だから、マヒロを心配して言ったのだが。一瞬焦点の合わなくなった瞳が見開かれ、次の瞬間マヒロの口元が冷ややかな笑みを作った。歪んだ表情のまま、言葉を吐き捨てる。

「やっぱりクレナイも皆と同じね。良いわよ。気狂いとも言いなさいよ。私からしたらこの世界の方がおかしいのに」

その台詞にやっと光教団の意図を理解した。彼らはマヒロを軟禁せざるを得なかったのだ。光子が気狂いだと知れたら、光教団の都合が悪い。しかし、続けられた言葉でまた考えを改める事になる。

「何なの一体。私は普通に生活してただけよ。車にはねられて死んだと思っただけいきなりこんな所にいるし。天国かと思っただけコウシサマとか言われて祀られてるし。私が神に選ばれた存在？まさかむしろ見捨てられたに違いないわ。夢なら早く醒めてよ。異世界トリップなんて現実起こったら悪夢でしかないじゃない。こんな世界私は知らない！神がいるんなら私の世界に帰して！」

もはや私を見ていないマヒロは、虚空に向けてそう叫ぶと狂ったように涙を流し始めた。

「死んだ？世界が違う？」

上手く働かない頭でかろうじて理解出来た所を口に出すと、おえつを漏らしながらマヒロは肯定する。

「そうよ！こんな世界知らないわ！神なんて知らない。ハクトなんて知らない！コウシサマなんて言われても受け入れられるか！」

涙を流しながらしかと此方に視線を向けてきたマヒロからは、絶望が伝わってきて。

そして私は込み上げる笑いを堪える事が出来なかった。

「異なる世界か。つく。はは。あははっ」

狂ったように笑う私を、奇妙な目で見つめる存在を今は気にしていられなかった。それほどまでにおかしかった。

「傑作だっ。ははっ。光子が異世界から来ただと？神も粹な事をなさる！」

「クレナイ？」

しゃくり上げながら、しかし涙は止まったらしい。私を見つめる潤んだ瞳には僅かな怯えと隠しきれない期待が浮かんでいた。

「私の言う事信じてくれるの？」

恐る恐る伺うマヒロに、笑い過ぎて目尻に浮かんだ涙を拭いながら微笑みかける。

「信じるさ。異世界からの来訪者」

光教団が隠しかつたのはこれだ。光子が異世界人など、知れば光教団の存在自体を揺るがす事態。何せこの世界の人間に、光子になれる存在がいなかったのだ。

神は我らを選ばなかった。

通常光子は五百年周期で現れる。しかし、丁度光子が現れるはずだった二百年前、光子は見つからなかった。当時は光教団が南方と北方で分かれ影で多くの血が流された。その血を神が厭うたのだと、神から与えられた罰なのだと、主張する者は光教団から追放され、結局南北統一がなされる事はなかった。

もしかしたら、今回マヒロが現れたのは、神が与えたもうた罰なのかもしれない。わざわざ他の世界から光子を連れて来たのは、僅かな慈悲と、我々への警告。つまらぬ争いに身を落とす我らは光子にはなり得ないという警告。

勿論全ては想像でしかない。だが、マヒロという存在は現実だ。そして、私の野望も変わらない。

「マヒロの頭は悪くない。これが一年かけて私が出した結論だ。そして、下らぬ嘘をつく人間でもない。マヒロに益がないからな。だから私はマヒロの言葉を信じる」

そしてマヒロが異世界の人間であろうと、私のすべき事は変わらない。マヒロは光子だ。それだけで、利用価値がある。

「私も初めて異世界という存在を知ったから帰り方は分からない。だが、調べてみよう。何か分かったら必ず教えると約束する」

絶対に帰してなどやらないが。甘い言葉を吐き続ける。

「何でクレナイはそんなに優しいの？」

つぶらな瞳は、私への信頼に溢れている。しかし、一欠片の揺らぎを持っているようで。その揺らぎを忘れるな、全てを疑えと念じながら、全く別の言葉を贈った。

「故郷に帰りたいと願う気持ちはよく分かる。私も、故郷に帰りたい」

同情と共感を呼びさます言葉に、マヒロは目を丸くした後おずおずと口を開いた。

「クレナイも帰れないの？」

「ああ。もう故郷は滅びた。今帰っても、何もあるまい」

嘘は言っていない。故郷に帰りたいと願う気持ちも、既に故郷がない事も。

マヒロと違うのは、故郷に帰れないという事実を受け入れているか否か。しかしそれを表面に出す事はせず、曖昧な笑みを浮かべる。なるべく悲し気に見えるように。

「そっか。ごめんね、疑っちゃって。なんか駄目だな私。好意も素直に受け取れなくなってる」

素直に私を信じてしまう事の方が駄目なのだが。まあ今は良い。いつかきつとこの娘に疑いの眼差しを向けられる日も来よう。それまでは、ぐずぐずに甘やかしてやる。

「気にやむな、マヒロ。今日は疲れただろう。もう眠るが良い」

言ってベッドに寝かせる。

「うん。寝るまで傍にいてもらっても良い？」

「ああ。いてやるから。お眠り」

余程疲れていたのか。すぐに寝息を立て始めたマヒロの髪を撫でながら、一年目にして漸く彼女からの信頼を得る事が出来たと実感した。

だが、まだ動くべきではない。弟子のシロウからの連絡もまだ来ぬし。気長に待つか、と結論付けてマヒロに別れを告げた。

「また来るよ、光子」

マヒロが寝ているのを良い事に、自分に言い聞かせる様にその単語を口にした。此処にいるのはか弱き娘であり、異世界からの来訪者であり、そして光子なのだ。人ではない存在なのだから、幾ら利用しても構わない、と。

5 出立

『お久しぶりです。この度何とか住所が定まったので連絡しました。今お世話になってる人は凄く優しいです。世界で一番優しいかも。でもすつごく忙しそうなので、いつもはその人と一緒にいる人に面倒を見て貰ってます。毎日楽しいです。時々町に出たりもします。良いお土産が見つかったので楽しんでいます。下さいね』

光子の存在を知ってから一年と少し経った頃、やっとシロウから手紙が届いた。

何ともいえない馬鹿さ加減が染み出た文章だが、内容はなかなか興味深い。

「世界で一番、優しい人とは恐らく北方光教団ボルア地区の代表者の事だろう。実質的な北方光教団のトップだ。さらに、その人と一緒にいる人」とは代表者の白騎士を指すはず。無事に取り入る事が出来たらしい。「良いお土産」も楽しみな事だし。

正直そこまでやってくれるとは思っていなかった為、良い意味で期待を裏切られたと言える。

また、マヒロも一年経った頃から随分心を開くようになってくれた。異世界から来たという事を明かして安心したのか、マヒロの世界の話をしてくれるようになった。

中でも興味深いのは、白徒のいないマヒロの世界ではイシャという職業の者達がいるようだ。しかも薬師のように薬を使うだけではなく、シュジュツというものを行って皮膚を切って内臓に刃物を入れるのだとか。それだけではなく、レントゲンなる代物を使うと内臓を見る事が出来るらしい。

触診しか出来ないこの世界と比べて随分技術が進んでいる。まあ

白徒は病状や怪我の具合など関係なしに治癒を行えるのだからそういう技術が発達しなかったのだらう。仕方ないと受け入れるしかない。

そしてマヒロの方も異世界という事実を受け入れる事ができたから、此方の知識を吸収しようと質問攻めにしてくる。私もそれに答えようと、まだ明かしてはならない事には触れず、一般常識に収まる範囲の知識を与えた。ナザンザ国の事。民の目から見た光教団の事。国や光教団の裏の顔や光子の事には一切触れない。まだその時期ではないから。

そうして、二年が過ぎた頃。そろそろ頃合いかと腰を上げる事に決めた。まずはシロウに戻って来いと手紙を出し。ナザンザを逃げ出した私を受け入れてくれたこの国の王に暇を願い。二年前から準備を進めていた為、惜しまれながらも無事に許可を得る事が出来た。

十年の時を過ごした家を掃除しながら、思い出すのは最後にマヒロと会った時の事。

暫く来られないかもしれない、だが次に会う事が出来れば初対面の振りをして欲しい。そう伝えれば、きょとんと愛らしい表情を浮かべながら曖昧に頷いてくれた。

早くマヒロに会いたい。

そんな急く気持ちを抑え込み、長らく時を過ごした仮宿を後にする。今回は髪を染めない。いつものように黒のワンピースを着て。その上に真紅のローブを羽織る。魔女クレナイの証たる赤を背負い、

静かにこの地に別れを告げた。

彼女の胸の内

私の名前は相原真陽という。英語風にいえばマヒロ・アイハラ。肩書きを上げるならば花の女子高生、テニス部平部員、四人家族の長女で兄が一人ってこれは肩書きじゃないか。まあ何を主張したいのかというと。

私は断じてコーシサマとかいう肩書きを背負った記憶はない！という事だ。

事の始まりを忘れない。十六歳の誕生日から一週間経った日の学校帰り。私は、車にひかれた。

雨の日だった。普通に歩道を歩いていた私は、突然鳴り響いたクラクションの音に思わず振り向いて。視界に入ってきたのは、滑る様に私に向かってくる大きな物体。それが車だと認識した瞬間、身体がふつとばされた。浮遊感とめまいを覚え、一瞬後に地面に叩きつけられたと理解した時、私は覚悟したのだ。

ああ、死んだ。

よくいう走馬灯なんて浮かんでこなかった。ただ、家族に申し訳ないと思っただけ。気弱だけど優しいお父さんは絶対泣く。いつも忙しく働いているからあんまり会えないお母さんだって、私への愛情に溢れていた。喧嘩ばかりしてた兄貴は……清々したかもしれないが。

そこまで考えて、私の思考は薄れていった。遠くから焦ったような人の声がして。視界を滲ませる雨粒が、彼処での私の最後の記憶。

目を醒ました私は、まず寒さを感じた。ブルツと震える身体を両腕で抱きしめて。恐る恐る瞼を開ける。

最初に確認したのは、身体。驚くべき事に、着ていたセーラー服は綺麗に形を保っていた。絶対血まみれだと思ったのに。しかも雨に濡れていたはずなのに、何故かからつと乾いている。

次に辺りを見渡して。私は自分が広い洞窟の様な場所に横たわっていた事を理解した。どおりで寒いはずだ。床は石だし。心なしか、すぐ横にある池と呼んでも良い程の大きな水溜まりから冷気が漂っている気がする。全く見覚えのない場所だ。

まあそれら諸々の要素。主に一般常識で理解出来ない事態に、私は事実を誤認してしまった。

つまり、此処は死後の世界だと思い込んでしまったのである。

考えてもみて欲しい。私は、車にひかれた、という事実を覚えていたのだ。その直後見知らぬ場所にいれば、ああ三途の川渡っちゃったんだな、と思ってもおかしくはないはず。

すぐ傍の池が三途の川なのかもしれない、なんて信仰心を欠片も持っていない私だが、半ば本気で考えていた。

そこに、あの男がやって来たのである。

仄暗い空間に一筋の光が差し込み、私は初めてこの場所に入出口がある事を知った。扉を開けたらしい人物からは私がバッチリ見えているはず。驚いたような、声にならない音が聞こえたから。

そして私も同様に驚いていた。現れた人物があまりにも美しかったから。

チャイナ服男性版みたいな白く長いワンピースのような生地は腰からスリットが入っていて、下にはいてるズボンも同じ白。全身白

なんてよっぽどスタイルに自信がないと着れないだろう。そしてその人物は長い足を生かしてそれを見事に着こなしていた。

更に驚きなのは、見事な白髪だ。白髪なんだけど、顔立ちが端正なせいか似合っちゃってる。切長の瞳は今真ん丸くなってるけど、それが可愛い。触れちゃいけないってくらい冷え冷えとした美しい顔立ちだから余計ギャップ萌えみたいな感じで。

そうして私がまじまじとその人物を観察している間中、相手はぴくりとも身じろぎしなかった。それを良い事にじっと見つめて。私は一つの結論を出した。

「神様？」

「光子様……」

私の発した言葉は、ハッと驚くような神々しい笑顔を浮かべた仮神様の口から出てきた美声に遮られてしまった。声も低過ぎず高過ぎず素敵です。ってか、この人何て言ったの？

仮神様は私が身体中から出すハテナマークには気付いてくれなかった。ただゆつくりとその長い御足を動かして此方にやってくる。間近で見ても素敵です。格好良いです。しかも、相手超良い笑顔。これってやっぱりお迎え、だよな、と考えた私は座りこんだまま仮神様が此方に来るのをじっと見つめていた。今更逃げるつもりはない。現世に未練はがつつりあるが、こんな素敵の人が迎えに来てくれるならそれはそれで良い気がする、なんて考えちゃったせいだ。

仮神様は私の目の前まで来ると、すっと屈みこんで視線を合わせてきた。薄い黄色に見える不思議な光彩を眺めていた私はさぞアホ面だったに違いない。

そして、彼は微笑みながらその言葉を口にした。

「お待ちしておりました、光子様」

コーシサマって何ぞや？よく分からないけど、やっぱりお迎えだっただろう。

そう認識した私は微笑み返して。仮神様が差し出した手に、手を伸ばしてしまった。

何度でも言う。不可抗力だ。だって、私死んだと思ってたんだもん。相手神様だと思ってたんだもん。普通考えないじゃん。

まさか自分が神様っぽい存在だったなんて。

私がおかしいな、と気付いたのは、それから二週間が経ってからだった。

遅いというなけれ。仕方なかったんだ。あの日出会った仮神様、ヴィンセントは私をある一室に連れて行った。

私の認識では、そこは天国であるはずだった。だから、何か豪華な家具だったり高価そうな絵が飾ってあったり床が大理石っぽかったりするの、まあ天国だしな、で納得してしまったのだ。

はい、馬鹿です。馬鹿でした。ちよつと頭ふわふわしてたんです。夢心地っていうか。死んで良かったかも、なんて思っちゃったんです。

この部屋にやってくるのは三人だけ。初めに会った超絶美形ヴィンセントに、ふんわりした優しい雰囲気のもの。モノは私のお世話をしてくれて、お姉さんみたいな人。それからヤンというスキンヘッドで無表情ないつも剣を持ってるおっかない兄ちゃんの三人。

皆いつも中華風の白い服を着ていて、それは非日常を演出しているように思えた。

そして、彼らは私をコーシサマと呼んだ。だから私は、コーシサマという単語は天国では死人を指すのだと理解した。うん、事実誤認だ。

それが間違えだと気付いたのが、此处で暮らしてから二週間も経ってからだだったのである。

その日私はいつもの様に美味しい食事を持ってきたモナに、兼ねてから疑問に思ってた事をぶつけてみた。

因みに此处で出される料理は私の知らない物ばかりだったが、天国だから知らなくて当たり前だと私は思っていた。馬鹿だ。馬鹿過ぎて泣けてくる。

「ねえ、モナ。モナはいつも私の世話してくれるけど、他のコーシサマの世話はしなくて良いの？」

死人は日々数を増やしているはずで。私の中でコーシサマは一杯いるはずだった。いつか他のコーシサマにも会いたいな、なんて呑気に考えていた。

だからそんな私にとって、その時のモナの反応は不可解なものだった。机に置いた食事から手を離すとすごい勢いで私をガン見して血相を変えながら部屋を飛び出して行ってしまった。

一方置いて行かれた私はどうしたら良いか分からない。

とりあえず置かれた食事に集中する事にしたから。部屋の隅に突っ立ったヤンが、普段の無表情が嘘のように大口開いてた事なんて知る由もなかった。

そしてその後やはりもの凄い勢いで部屋に飛び込んできたヴィンセントとの問答で、私は初めて知る。

私は死んでなくて。

此処は天国ではなくて。

まして日本なんて何処にもなくて。

コーシサマは神様のような存在だと。

私はその日初めて、この世界に触れたのだ。

それからは酷かった。私が自分の生い立ちを説明する度に、三人共生暖かい目で私を見る。コーシサマを知らないと言えば、きつい眼差しで睨まれる。日本に帰りたいと訴えれば緩く首を振られる。毎日泣いた。寝室に籠って、誰も入れずに。

泣き疲れてふて寝してから、隣の部屋から話し声が聞こえた事がある。

「こういう言い方は何だが。光子様は気狂いでいらっしゃるのだろうか」

「そんな言い方はなりません！何かがあって記憶が混乱されているのかも」

「突然泉の脇に現れたのだろう？何があったのか伺っても、埒がわからない」

「しかし、あの方は確かに光子様だ」

漏れ聞こえる溜め息に、再び涙が溢れた。何が何だか分からない。けれど、非常識な何かに巻き込まれていて。此処は日本ではない。

何処か遠くに来てしまった事だけは分かった。

彼女に会ったのは、そんな時だった。

いつものように泣いていたら、寝室に続いている浴室から物音がして。恐々呼びかければ、高めの声が返って来た。

少し会話をしてからおずおずと扉を開く。危険かもしれないとは考えた。それでも、何か変化が欲しかった。

そして開いた扉の先にいたのは、愛らしい少女だった。長い銀髪は何故か少し薄汚れているが、顔立ちの愛らしさを損なう程ではない。

そして何より目を引いたのは、その服装。黒いワンピースは、白で統一された世界で色鮮やかに映った。

違う、と初めて思えたのだ。今まで会った三人と、彼女は違う、と。

そんな直感を裏付けるように、彼女は鈴の鳴るような声で私の名を呼んでくれた。

「マヒロ」

コーシサマではないその呼び名に、涙が出そうになった。それほど嬉しかったのだ。彼女は私の問いに答えはくれなかった。けれどもそれでも良かったのだ。

私を私として認識してくれる存在が、唯一つの希望のように思えた。

それからその少女、クレナイは一月に一回程度の割合で尋ねて来てくれた。いつしか彼女の来訪を楽しみにしている自分がいて。

彼女の正体なんてどうでも良かった。私の話を聞いてくれるだけで良かった。

そして一年が経った頃だろうか。私に第二の転機が訪れた。

その日はいつもの様に午前中は文字の読み書きを教えてもらっていた。

言葉は普通に通じるのだが、文字がさっぱりだという事が分かってから勉強の毎日だ。象形文字より難しくひらがなより数の多い文字に悪戦苦闘する私は、それでも希望を捨てきれなかった。

日本で過ごして、せいぜい英語くらいしか習う事の無かった私が知らない文字なんて、世界には沢山あるはずだ、という希望。

異世界、だなんて馬鹿げた発想、認められるか。

その頃には私は今自分がいる場所がコーキョーダンとかいう宗教集団の土地で。ヴィンセント達がハクトとかいういわゆる教徒だという事を教えてもらっていた。

だから敢えて私は、彼らは新興宗教を信じこんでいる怪しい存在で、何を思ったのか私を拐ってコーシサマとかいう教祖に奉りあげたいのだ、という三文小説みたいな話を作った。

そうすれば、彼らの私への接し方がいやに丁寧なのも説明出来る。今はとりあえず彼らを刺激しないように過ごして、隙を見て逃げればきっと家に帰れる。

そう信じていたかった。

話を戻そう。

字を教えてもらっていた私は、ボケっと考え事をしてしまったの

だ。なかなか好転しない事態に焦れつつ考えていたのは、勿論家族の事。正確には分からないが、此処へ来てからもう一年は経っている気がする。もう死んだと思われるだろうか。葬式上げられちゃってたらどうしよう。学校はどうなっているのだろうか。

そんな事を考えていた私を心配したのだろうか。突然肩に置かれた手を、私は反射的に右手で振り落とした。その右手に先が鋭利に尖ったペンを持っていたのを忘れて。

自分の暴挙に半ば呆然としながら振り向けば、そこにいたのはヤンだった。中途半端に上げられた腕に赤い傷が出来ていて。

「あ……」

「申し訳ございません。声をおかけしたのですが」

低く静かな声で紡がれるのは謝罪の言葉。いつだって腰の低いヤンの態度に、勝手だと分かっているながら動揺する。

「ど、どうしよう。ねえモカ、どうしよう。血が」

おろおろと文字を覚えてくれていたモカにすぎる私に、ヤンは低く頭を下げて血の流れる腕をもう片方の手で覆った。

「光子様。見苦しい所をお見せしてしまい申し訳ありません。大変恐縮ですが、暫し御前失礼して宜しいでしょうか？」

「馬鹿！」

反射的に怒鳴ってしまった。啞然と私を見上げるヤンの視線を無視してモカに訴える。

「早く絆創膏をつ！あと傷薬」

焦りだけが募って声を荒げた私に、モ力は場違いにゆったりとした笑みを見せる。

「それには及びませんよ、光子様。ヤン、此方に腕を」

「しかし、光子様に不浄の血を見せる訳には」

「誰もそんな事気にしてない！」

この期に及んで見当違いな事をぬかすヤンを怒鳴りつければ、モ力も加勢してくれた。

「ヤン。光子様のおっしゃる通りに」

柔らかく、だが凜とした声に、ヤンは渋々傷口を見せるように腕を差し出した。

そこからの事は思い出したくない。だって、私の理解の範疇を越えていた。

モ力が右手をヤンの傷口にかざして。そこから白い光が現れたのだ。文字通り何もない所から。

その光が傷口を包み。すうと音もなく血が止まって傷が消え。

ただその周辺に残った血だけが、そこに傷があった事を証明していた。

「な、に。それ？」

かろうじて出た声は震えていた。今見た光景を、自分の目を疑った。

だって、こんな小説とか漫画でしか有り得ない現象で。フィクションの世界に迷い込んでしまったかのようだった。

「超能力？」

呆然としながら呟いた言葉に、反応したのはモカだった。

「神から授かり申した力でございます。成人の儀をお迎えになれば、光子様は白徒たる我々の誰よりも尊いお力をお授かりになる事でしょう。」

神？成人の儀？

いや、午後の授業で習ったよ。神はこの世界を作った人で、ハクトは神に選ばれた存在で、同じく選ばれた私は成人の儀を迎えたらコーシサマになるんだよ、的な事を。

でもさ、そんなオカルトじみた話信じるはずないじゃん。話半分で聞き流すに決まってるじゃん。

私も超能力使えるようになるって？そんなの嬉しくない。そんなんより家に帰してよ。家族に会わせてよ。友達に会わせてよ。

「って」

「光子様？」

柔らかい声を返すモカに申し訳ないと思いつつ、衝動を抑えられなかった私は、腹の底から激情を吐き出した。

「出てって！嫌だっ！出てってよ。お願いだからっ。一人にして！」

最近は癇癢を起こす事はなくなったけど、以前は頻繁に怒鳴り散らしていた。その時と同様に、彼らは音を立てず静かに部屋を去っていく。

ぱたんと扉が閉まる音が耳に届いて、やっと詰めていた息を吐き出す事ができた。同時に耐えていた涙がぼろりと頬を伝う。

信じたくなかった。

でも、目の当たりにしてしまった現実に。

覚悟を決めるしかなかった。

数日後、訪れたクレナイに。恐る恐る問うた。答えは予想していた。

日本が無いと言う。アメリカもヨーロッパも知らないと言う。世界は一つの大陸で、北方と南方、中央の自治区に分かれているというモカの言葉を裏付けるような台詞を吐く。

コーキョーダンとかいう奴らが私を騙していると信じたかった。クレナイも奴らとグルなのだと、疑いそうになった。そうすれば、楽だった。なのに。

「信じるさ。異世界からの来訪者」

その一言で、現実を認めざるを得なくなった。

クレナイは、私を信じてくれた。なら、私はクレナイの言葉を信じる。

私は、異世界にいる。

この地には唯一の神がいて、白徒は神から超能力を与えられた。

私は、光子様というこれまた超能力を与えられる存在であるらしい。

全てを受け入れた訳ではない。特に光子様だなんて、絶対に受け

入れられない。

けれど全てを拒絶する事は、もはや出来なかった。

ある男女の会話

「王が死んだと聞いた。本当か？」

「ああ。くそ親父が次の王位につく」

「そうか。ではお前も行くのだな」

「行くに決まっているだろう。俺はもうあの頃みたいに簡単にやられたりしない。お前もいるんだし」

「は？私にもついて行けと？」

「今更何を言ってるんだ。お前が俺に王になれと言ったんだぞ。責任取りやがれ」

「それでも決めたのはお前だ。私に責任はない。まだまだ此処でやるべき事は残っているのだし」

「お前はこんな田舎で満足するような女か？」

「……」

「俺と共に王都へ来い。国中に薬師を広めるには一番の近道だとお前だつて分かっているはずだ。此処にはお前の弟子が残れば良い。随分腕を上げたと聞いたぞ？そうそう、弟子といえはシロウが白徒だったんだつて。光教団に入るんだろう？厄介払いができて良かったじゃないか」

「貴様っ」

「時が来たんだ、クレナイ。俺は王になり、国を守る。シロウは白徒になり、民を守る。お前は？クレナイは何をなす。何をしにこの国へやって来た」

「私はっ。私はただ光教団の力が及ばない人々に癒しを与えたいだけだっ！」

「なら俺と共に来い。跪けとは言わない。お前は俺の力を利用すれば良い。俺もお前の力を利用する」

「お互いの目的の為にっ？」

「ああ。俺は王都に行って軍を鍛え直す。白徒が王都から出て行っ
てから訓練もままらない状態のようだし、死傷者も格段に増えた。
薬師の、お前の力が必要だ」

「私に人殺しの手当てをしると？」

「このままだと隣国に攻め入れられる。そしたら辺り一面血の海だ。
お前も嫌だろう？それに軍人は貴族だ。恩を売っておけば後々金銭
面の援助が受けられる。それを使って薬師を育成する学校を作れば
良いじゃないか。国中に薬師を広めろ」

「命令か？」

「提案だ」

「……」

「好きだ、クレナイ」

「何故今それを言ったのか聞いても？」

「今じゃなきや言えない。会った時から好きだった。お前の強い眼差しに惹かれた。世の中に絶望しきってる癖に怪我人や病人を見たら治さずにいられないのは立派な病気だと今でも思ってる。それでも、お前にはそうせざるを得ない事情があるんだろう？」

「何が言いたい」

「俺と出会う前からお前は何かを目指していた。届かない何かに必死に手を伸ばすお前に、惚れた。でも、俺は王になると決めたから俺は国を、民を愛する。お前を幸せにする事は出来ない。だが、お前の手助けは出来る」

「先程私を利用すると言った口で何を言う」

「どちらを信じるもクレナイの自由だ。だが、もしクレナイが俺と来ないでこんな小さな所で留まると言うならば。目的を達成しないと言うならば、俺はお前を浚って遠い地に連れて行くぞ」

「お次は脅迫か？」

「クレナイに心底惚れ抜いている。でも、俺は王になるからお前を諦めると言ってるんだ。傍にいただけで我慢してやる」

「お前なあ」

「傍にいてくれ。お前がいたら、俺も頑張れる。くそ兄弟共と競ってやる。一人じゃ不安なんだ。こんな髪で生まれなければ良かったと、また考えてしまう。クレナイが好きだと言ってくれたのに。また俺は城で一人ぼっちになってしまふのかと思うと怖くて仕方ない」

「アラン……」

「良いか？この俺がここまで弱音吐いてやってるんだ。さっさと折れろ」

「何でそこまで偉そうなんだ、お前は」

「答えは？クレナイ」

「私を連れて行く事で嫁がなくなっても知らんぞ。何せ魔女と呼ばれる女だからな」

「まあな。つくづく不思議だ。出会った頃からお前は十五のままだ。本当はどれだけ婆さんなんだ？」

「煩い。その婆さんに惚れた奴が何を言う」

「百歳超えた婆さんでも俺はお前が好きだよ。嫁が来なかったらお前を貰いたいくらい」

「何だ。貰ってくれないのか」

「え？」

「何でもない。忘れる」

「クレナイ！もう一度言え！いや、それよりお前俺の事好きだろ」

「煩い。お前の言う通り、私の目的を達成するには王都に行った方が良さそうだ。せいぜい利用してやるから早く王座につけよ、アラ
ン」

「素直じゃねえな、クレナイ」

「図に乗るな」

「良いさ、時間はたっぷりある。一先ず王都に行くか。そうだ、クレナイ。真紅のローブを贈ってやる。俺の髪と同じ色だ。王都の奴らの度肝を抜こう」

「それは良い考えだな。嫌われ者の帰還には誂え向きだ」

「嫌われ者って言うなよ。傷付くぜ？」

「良いではないか。忌色を纏った王子と魔女。嫌われ者が何処までやれるか試してやるうではないか」

「よく言った。それでこそ俺の惚れた女だ、クレナイ」

第一章 1 ナザンザ国

意気揚々と出立し、ナザンザ国との国境で第一の関門に突き当たった。

今までは密入国していたが、今回はそうはいかない。魔女クレナイがナザンザ国に存在するという証拠を残さなければならぬのだ。その為の布石として、正面から関所に向かう。

流石に真紅のローブは目立つのか、関所に並ぶ前から人々の視線が集まってきた。漏れ聞こえる魔女という単語に薄く笑みを浮かべた時だった。関所から兵士が一人、興奮した様子で走り寄って来る。

「失礼ですが、貴殿はナザンザ国の英雄、魔女殿であらせられますか？」

兵士の言葉に周囲のざわめきが収まり、沈黙が走る。皆興味津々といった体だ。鬱陶しい事この上ないが、必要な事だと言い聞かせ、意図的に口元だけで笑みを作る。

「英雄かは知らんが、貴様のいう魔女の名がクレナイであるならば、それは私の事だ」

勿体つけた言い方をしてやれば、まだ年若い兵士は最上位の敬意を示す礼を取った。それと共に沈黙を保っていた野次馬がおもむろに騒ぎ出す。

厄介だな。仕方なく彼らを横目で見ながら兵士に声をかけた。

「王に伝えよ。魔女が来た、と。それから返答が来るまで関所に留まっても良いか。此処は騒がしい」

これみよがしに溜め息を吐き出せば、焦ったように兵士は面を上げて手を差し出す。

「関所までご案内致します。荷物をお預かりしても？」

「要らん。大事なものだ」

すげなく断るが、それで荷の中を察したらしい。更なる敬意を籠めた視線を向けられ、それだけで既に逃げ出したい気分になった。これだからナザンザに来るのは憂鬱だったのだ。

関所の中の客室に通されるまでも兵士の畏敬の視線が苦痛だったが、客室に着いて一息付く間もなく来訪者がみえた。予想していなかったと言えは嘘になる。けれども漏れてしまう溜め息を隠す事もせず、入室の許可を出した。

現れたのは一見して平兵士とは違う濃緑の軍服を身に纏った壮年の男。恐らくこの関所の主であろう。

「お初にお目にかかります、魔女殿。私は国境警備隊所属のヒースと申します。不肖ながら此処の責任者を」

「御託は要らん。暫く厄介になるぞ」

長くかかりそうな口上は途中で切るに限る。無駄であるし、相手の反応で大体の人格が掴めるからな。

ヒースは当たりだったらしい。気を悪くした素振りもおくびも見せず、苦笑を浮かべながら腰を折った。

「承知致しました。既に王都へ早馬を走らせております。遅くとも

十日で返答が来るでしょう。此方でご不便がありましたら、私に何なりとお申し付け下さいませ」

「助かる」

早めに話を済ませて休みたかったのだが。ヒースは去る気配を見せない。少々苛立ちながら睨みつけてみると、食えない笑みを浮かべながらこんな事を言ってきた。

「ところで魔女殿。実は貴殿の来訪を知った薬師達が騒いでおりまして。もしお時間がありましたら、是非ご講義頂けないでしょうか？」

もし魔女がナザンザに來た理由を探ってくるようなら即座に切つて捨てる心構えはできていたのだが。それには触れず、更に図々しいともいえる頼み事をしてきた男に意地の悪い言葉をかけてみる。

「ほう。この私に無償で働けと？」

暗に報酬寄越せとほめかせば、ヒースはにやりと笑った。

「魔女殿は薬師の祖。可愛い子供達をお見捨てにはしますまい」

耐え切れず、私も笑ってしまった。なるほど。私が本当に魔女なのか、疑っているのか。愉快的気分になさせてもらった礼だ。ただ働きしてやろう。

「貴様の言う通りだ。よし、薬師の元へ連れていけ。可愛い我が子が励む様を見てやろう」

そうして連れて行かれた先で。三人の薬師と引き合わされた。全

員王都にある薬師院出身であり、薬師院を作った張本人を見て些か興奮していた。が、私とて薬師を見れば胸がうずく。

「此处にある薬で全てか？」

薬師室に連れて行かせ、中身を確認する。

「はい。何か問題でも？」

恐る恐る聞いてくる薬師に、意図して笑みを作る。

「キリムの粉は無いのか？」

「キリムは高価なので代用品としてセトラという植物をすり潰した物を使っています」

「セトラも良いが、増血剤としてはキリムに優るものはないだろう。血の気の多い連中とて切られれば血を失う。値が張るのが問題ならば、そうだな。隣国で見つけたのだが、リーンという植物がある。あれの根も良い代用品になろう。これだ」

言って荷を開ける。

荷の中には新たに隣国で見つけた薬になりそうものがぎっしり詰まっている。王都の薬師院に持ち込もうと思っただけの品だ。目を輝かせて荷に興味を示す薬師達に苦笑がもれた。

「薬師院に持って行く品だ。いずれは国中に広まるう。少し早いが説明してやろうか？」

答えは分かっていた。

薬師達と戯れている内にあつという間に時間が過ぎてしまった。
そして五日目。いつものように薬師室へ向かおうと準備をしていると、ヒースが部屋を訪れた。

「魔女殿。どうやら王が貴殿をお求めのよう」

開口一番満面の笑みでそんな事を言つて来たヒースに、いつでも出立出来るようまとめていた荷を肩に背負う。それにしても。

「早かつたな」

七日はかかるとふんでいたが。

「ええ。しかも一個小団の迎え付きです。愛されていますね。すぐに出発なさいますか？」

戯言には付き合わず、扉へと向かう。

「無論。薬師共には宜しく伝えておいてくれ」

扉を開けて支えてくれたヒースの横を通り抜け、関所の出口へと向かう。すぐ後ろから足音がついてきた。

「かしこまりました」

暫く足音だけが廊下に響き渡る。すれ違った兵士は皆道を譲り、敬礼してきた。

そして漸く出口が見えて来た頃、立ち止まって振り向く。

「世話になった。この事は王にも伝えておこう」

「此方こそ、薬師達へのご指南有難うございました」

最後までヒースは私の目的について聞かず、また過去の栄光に触れる事もなかった。ただただ礼儀正しく魔女を受け入れ、送り出すその態度に、この国の希望を見ながら出口に向かう。そして。

帰って来たぞ、友よ

そう心で呟きながら、十年ぶりにナザンザ国の地へと足を踏み出した。

2 王都

馬鹿らしい程の大人数に囲まれ、これまた馬鹿らしい程の豪華な馬車に揺られて四日。やっと王都に辿り着いた。

しかも先触れがいつていたのか、王城へ着いてすぐに控えの間へ案内される。

そうしてやっと腰を落ち着かせながら、城内に入ってから向けられている奇異の視線に気を飛ばした。

道中向けられた畏敬の視線とは別種の、何故今更魔女が来たと言いた気な怪訝の籠った視線。

それらを浴びてやっとナザンザ国に帰って来たと思える自分に、やはり平穩な人生は向いてしまい。

「魔女殿。謁見の間で王がお待ちです」

然程待たずに侍従の声がかかった。魔女を前に緊張しているのか、声が若干震えている。しかしそれに気付いていない振りをして赤のローブを翻しながら立ち上がった。

長い廊下を歩かされ、辿り着いた謁見の間。

「魔女クレナイ殿」

その前の小部屋に控えていた衛兵に名を呼ばれ、両手を手前に掲げる。簡単に武器がないか調べる手がこれまた震えているのを見て取ってふっと笑ってしまった。

「も、申し訳ありません」

真っ青になった衛兵に、再び込み上げそうになった笑いをかろうじて抑えこむ。

同じ人間には変わり無いのだからそんなに緊張せずとも良いのにな。

「それほどに魔女クレナイは悪評が高いのか？」

少し意地悪な気持ちになって小声でぼそりと呟くと、衛兵は勢い良く首を振って恥ずかしい事を言ってきた。

「まさかつ。魔女殿は我らナザンザの救国主様ですから。どうぞ、お入り下さい」

救国主と来たか。どれだけ話が誇張されているのやら。私がした事といえば薬師の育成くらいなのだが。

しかし此処で反論しても意味はあるまいと、気持ちを切り替えて謁見の間の扉が開かれるのを見守った。

扉が開かれた途端痛い程に感じる人の視線。見やれば大広間の両脇に隙間が無い程人が立っていた。見覚えのある顔も多い。皆、十年ぶりに現れた魔女を見に来たのだろう。

そして、黒い絨毯が敷かれた先、三段高い所にある椅子に偉そうに座りくさっている奴と視線が合った。

燃える様な赤毛に、王族の特権である漆黒で彩られた服は好みなのか軍服を模している。彫りの深い顔立ちに、肉感のある厚めの唇が此方を小馬鹿にするような笑みを浮かべていて。

一瞬で目を奪われた。彼が王座に座っているのを見たのは初めて

だったから。まるで、亡き友がそこにいるようだった。

暫し見つめ合っただろうか。脇から咳払いの音が響き、我に返る。失態だ。

舌打ちしたいのに堪えて、代わりに今出来る最高の笑みを作ってゆつくり王座へと足を踏み出した。王座まであと十歩という所で立ち止まり、軽く頭を垂れる。膝をつく気はなかった。

「よく来たな、クレナイ」

低く響いた声まで亡き友にそっくりで。しかし今は感傷に浸る時ではない。

「大層なお迎え有難う存じます、陛下。今まで不義理をしておりました故、陛下の御温情、痛み入ります」

謙遜は最低限に抑える。魔女は王に屈する存在ではないと、この場で知らしめる。

不敬とも言うべき態度に、周囲の空気が剣呑になるが知った事ではない。すると、王は心底愉快そうに笑った。

「相変わらずだな、クレナイ。俺の元に下る為に再びこの地を踏んだのかと思ったが？」

「お戯れを」

有り得ないと彼も知っているのだろう。次に来るか、と身構えていたら案の定。正面から切り込まれた。

「では何故この地に？貴殿は十年前先王陛下と共に表舞台から降りた、という認識を持っているのは俺だけか？」

鋭い切っ先に、胸が震えた。ぞくぞくする。彼がここまで成長しているとは。嬉しくて、仕方ない。まるで亡き友と話しているようだ。

「再び表舞台に立つつもりはありません。私の目的は、そうですね。今この場に魔女クレナイが存在する事、とても言っておきましょうか」

クレナイの回りくどい言い方は嫌いだ、と愛らしく唇を尖らせながら言っていたのと同じ口で、彼は楽しそうに笑った。

「ほう。して、いつまで滞在する」

「明日には王都を発つつもりです。その後光市ジューンへ」

言い放った瞬間、初めて彼は目を丸くした。周囲からもざわめきが漏れ聞こえる。何故、と言いた気な視線と、咎めるような視線。どちらにせよ好意的なものではない。

それら全てを収める様に軽く足を踏みならした彼は、既に動揺を抑えて、しかし無理をしていると私には一目で分かる作り笑いを浮かべながら話を打ち切った。

「承知した。今晚は是非俺の客として城に留まってくれ。紅の館が空いている。下がれ」

一方的な宣言に、軽く頭を下げて引き下がる。目的は既に達した。これ以上衆目がある場で会話を交わすのはお互いの為にならないだろう。

案内の者に連れられて辿り着いた紅の館は、十年前と全く変わらなかった。亡き友が私の為に建てた館。

既に取り壊されてもおかしくないと思っていたのだが。予想は外れ、中は綺麗に整えられている。私の来訪を知ってすぐ整えたのかは分からないが、確かに彼が私の訪れを喜んでくれていると感じられた。

新鮮な生花が飾られた廊下を通り抜け、居間へ続く扉を案内の侍従が開けた時だった。不自然に動きが止まり、部屋の中を凝視した後此方へと不安気な視線を向けてくる。

嫌な予感に溜め息が漏れた。

「良い良い。お前は下がれ。使用人にも暫く此方には近付くなと言っておけ。荷物は寝室に」

手早く指示を出し、戸惑う侍従を手で追い払う。此方をちらちら見やりながら心配そうに立ち去る彼の背中を見送ってから半分開け放たれたままの扉をくぐった。

予想が当たっているのなら。

「久しぶりだな、魔女」

居間のソファにどっしりと腰をかけた男は此方を睨みつけながらちらとも笑わずそう言い放った。

「大層な歓迎痛み入る。元気そうで何よりだな、ホアン」

「愛人風情が我が名を呼ぶな！」

もう二十を過ぎているはずなのだが、反応は十年前とちっとも変わらない。流石に外見は成長したようだが残念だ、と思いつつ口先

だけで謝ってみた。

「すまなかった、王弟殿下」

「あんな奴の弟になつた覚えはないが？」

「だがアランがそう決めた」

亡き友の名を出し事実を淡々と述べながら向かいに腰をかけるとあからさまな舌打ちをしてくる。本当に、変わらない奴だ。むしろ前より悪化している気がしないでもない。大方周りの大人達に悪い話でも聞いたのだろう。

相変わらず、嫌な場所だ。友亡き後早々立ち去って正解だった。

「何故今更のこの顔を出した。くそ親父の次はカミロの愛人に収まる気か？残念だったな。今度の国王と王妃は仲睦まじくこの前もまた子供が生まれたばかりだ」

口が悪いのは父親譲りか。そういえば亡き友も親の事をくそだと公言していた、と懐かしく思いながらも、口角だけを上げて笑みを作る。

「聞いておるよ。四人目も王子だったようだな。三人も後継者がいてカミロも安泰だ。そろそろお前を担ぎ上げようとする輩も諦める頃合いかな」

「なんだ。魔女殿はカミロの立場が心配で戻ってきたか。お優しい事で。あいつはくそ親父にそっくりだからな。心配なさらずとも俺は王位に興味はない」

思わず自然に笑みがもれた。純粹に、悪どい笑みが。

それを目にしたホアンは再び舌打ちした後鋭い目つきを向けてくる。

「気味悪い女だ。何でもそ親父もカミロもこんな奴が良いんだか。女の趣味が悪いにも程がある」

「ほう。して、貴殿の女性の好みはどのような方なのだ？」

私にとってはかなり重要な質問だったのだが、些か唐突だったらしい。ホアンは眉根を寄せて訝かしむ。

しかし次の瞬間には思い起こしたように睨みつけてきた。

「そうやって煙にまくのがお前の手だったな。まあ良い。俺が言いたいのは一つだ。カミロには手を出すな。良いな？」

そうして立ち上がるホアンに、笑いが堪え切れない。こやつは氣付いているのだろうか？

「お前、それじゃあ唯兄を心配しているだけに聞こえるぞ」

「なっ。違う！俺はもうお前にかき回されたくないだけだからな！

さっさと帰れ魔女！」

捨て台詞と共に足取り荒く去って行く音を耳にしながら、今度ははつきりと口に出して笑った。

「ははっ。可愛い奴よ。やはりあいつ欲しいな」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7397n/>

魔女クレナイの企み

2011年10月7日19時36分発行